

症例13 心的な外傷

- ・ M氏 72才. 女性
- ・ 特記すべき既往症はなし

主症状

症状〔1〕群 置忘れが多くなる。

対人関係のエチケットを守れない。

着替えをしない。キッチンの整理も投げやり。

症状〔2〕群 以前から夫に不信感が強かったが、最近は著しく拒絶的。夫が何か話をしただけで、すぐ怒り出す。食事のため家族が食卓を囲むが、夫が参加すると不機嫌になる。先日は箸を夫に投げつけ、夫をのしりながら自分の部屋へ戻ってしまった。

生活歴

Mは甘やかされて育てられた。わがままで勝ち気な性格であった。

レストランを経営していた男性と見合い結婚をした。この夫も自分勝手に独善的な人であった。結婚後にわかったことだが、夫にはかなり前から交際していた女性があり、子供が一人いた。この件での夫婦間のトラブルは一応解決した。

しかし、その後、夫はまた別の女性と付き合いを始めた。Mは子供たちに「お父さんみたいな人になってはいけません。お父さんみたいな人と結婚してはいけません。私は本当に不幸です」と言い続けてきた。

【経過】

Mは入院してからも「夫は今頃、また浮気しているに違いない」と言って、イライラしていた。

時々面会に来る夫が「浮気はもうしていない。ずっと前に別れた」などと言うと、Mは激昂し、興奮が収まらなくなった。面会のときはいつもこのような状態が繰り返された。

夫に妻の言うことを受け入れるようにしてもらった。「浮気はもうしていない。ずっと前に別れた。第一、40年も前のことだよ」のような『言い訳』をやめてもらった。

そして、「ごめん。もうしないよ」「おまえの言う通りだ。すまなかった」とだけ繰り返してもらった。Mの経過は良好となった。

【メモ-1】

夫の女性問題で落ち着かない人生を送ってきたMは、自分の存在価値と自己実現(願い)を無視され続けた。このことによる心的外傷があった。

【メモ-2】

夫は、妻の願いと人格を無視し、妻の『自己実現』と『存在価値』を無視し続けてきた。このような過去に対抗して、今度は妻が夫の『存在価値』を否定し、夫の言葉(言い訳)を否定しているのである。

したがって夫の言い訳は妻の感情を今でも否定し、刺激する言葉でしかない。

この場合は『あやまる言葉』だけが妻を肯定し、妻の『存在価値』と『自己実現』を認める言葉であった。

【まとめ】

本当の意味での優しい男性と結婚することが、女性の大きな願い、つまり『自己実現』であり、『しあわせ』である。したがって、妻の『自己実現』がかなうようにすることが、妻の『存在価値』を尊重したことにもなる夫の行為である。

『自己実現』と『存在価値』に恵まれた人は、その人の生命がもつ知的限界まで、認知症を避けることができるのである。

『素敵な両親と同胞』と『素敵な配偶者・子供』と『素敵な友だち』に恵まれた人は、認知症を心とからだの極限まで避けることができる。

生命ある状態(例えば虎)が、存在し続けるためには『縄張り』が必要である。

我々の思考や感情も、健康であるためには『縄張り』が必要である。このことは言い換えれば、認知能力や思考能力も『縄張り』が必要ということである。この場合の『縄張り』が、①『両親と同胞との関係』・②『配偶者と子供との関係』・③『友だちとの関係』である。

そして、これらの縄張りを構成する①・②・③が素敵で、大きなものであれば、我々の『自己実現』と『存在価値』は更に強く確保されるのである。